

(研究発表)

「インターナショナルからトランスナショナルへ」

安孫子信

(法政大学国際日本学研究所客員所員)

2023年6月24日 / 法政大学・大内山校舎 Y703 教室

1. 「ひきこもりの国民主義」
2. 日本文学科
3. 国際日本学研究所 (HIJAS)
4. トランスナショナリズム
5. ナショナル、インターナショナル、グローバル、トランスナショナル
6. ベルクソン「閉じた社会」とナショナリズム
7. ベルクソン「開かれた社会」とトランスナショナリズム
8. ランドルフ・ボーンのトランスナショナリズム
9. リベラリズムとコミュニタリアニズムを越えて
10. 方法的ナショナリズムと方法的トランスナショナリズム
11. トランスナショナリズムと日本
12. 詩人伊東静雄の戦争詩

1. 「ひきこもりの国民主義」

地球規模で、気候変動、食糧危機、巨大感染症、戦争など、重大事態が相次いで起ります。他方で、とくに IT 技術の目を見張る革新が続いており、それによって情報、モノ、人の動きに、大きな変化が生じています。結果として、重大事態に対応する人間の動きが、世界の各所で、激化しています。たとえば、難民と言った形で。世界のそのような状況に、日本そして日本人はどう対応しているのでしょうか。

国内にすでに高齢化、人口減少、経済不振、貧困の拡大などの重い課題を抱え、もとより無関係ではありえないはずの国外世界の状況に対して、正面から対応がされているようには見えません。近年の日本に見られるのはむしろ非常に内向きの傾向であって、それは日本思想史の酒井直樹氏 (コーネル大学) によって「ひきこもりの国民主義」と呼ばれているものです。「ひきこもりの国民主義」を示す端的な事実として、酒井氏は、アメリカの大学で長年教えている中での気づきとして、日本からの留学生の数が、中国や韓国からの留学生の数と比較して、近年 (とくに 2000 年以降) 激減している事実を指摘しています。比較にもならないことですが、私自身が同じ時期に感じたこととして、以前に比べてゼミの卒業生たちが卒業旅行で海外に出なくなったな、ということがありました。「卒業旅行は皆で熱海に行く」などというわけです。「社会に出れば自由に海外には行かなくなるぞ」と勧めても、返って来る言葉は、「海外は危険だし、汚いし」といったことです。内に閉じていくこの「ひ

きこもり」の心性は、日本は安全で安心といった、日本の、あえて言えば比類なきへの信念、つまり「ナショナリズム」に立脚しているでしょう。

2. 日本文学科

こうして、2000年以降に「ひきこもり」の現象が顕著になっていったとして、まさにそれと重なる2002年に、法政大学に国際日本学研究所 (Hosei University Research Center for International Japanese Studies. [HIJAS]) が設立されました。「インターナショナリズム」を標榜する HIJAS の設立は、一定、この「ひきこもり」の「ナショナリズム」に対抗してのものだったと言えるでしょう。

ただここで HIJAS の設立は決して突然のものではなかったということ、それには前史が存在していたということを一言申しあげたいと思います。HIJAS 設立の一翼を担ったのは日本文学科ですが、法政大学文学部日本文学科は戦後の早い時期に (1948年に)、それまでの「国文学科」から「日本文学科」へと名称変更を果たすことで誕生しています。まわりを見れば、今日に至ってもまだなお多くの大学で「国文学科」の名称は残り続けています。しかし法政大学の文学部は、日本の文学を、一国の文学として閉じた形においてではなく、開かれた場所で、世界の文学の中に位置づけて扱うということを目指し、また決意して、「日本文学科」への名称変更を敢行しました。日本の文学は比類ないもの(「国文学」)ではなく、世界において、イギリス文学やフランス文学などもさまざまに比較されるもの(「日本文学」)です。「ナショナリズム」への抵抗ということで、これが HIJAS の前史ということになります。

3. 国際日本学研究所 (HIJAS)

さてこの「日本文学科」も一つの母体となって HIJAS が 2002年に設立されました。「日本文学科」が、日本文学を「ひきこもり」から出すことを課題としたとすれば、HIJAS が課題としたこと、それは、日本文学について日本人が行っている研究を「ひきこもり」から出すことだったと言えるでしょう。日本文学は世界文学の一面を占め、世界文学の中にすでに位置づけられていたとして、日本文学を研究すること、それは長く、日本人の独壇場と見なされてきました。日本文学の研究ということではとくに世界から学ぶことはなく、それを世界で位置づける必要もない。たとえば『源氏物語』について博士論文を国文学科で仕上げる時、外国で外国人が外国語で書いたような論文への参照がまったくなくても構わない、といった状況が続いていたと思います。もしかして、外国人に日本の文学が本当に分かるはずはないときえ考えられていたかもしれません。日本文学を研究するということで、日本人は「ひきこもり」を起していたと言えるでしょう。しかし、この間に、諸外国における日本研究は進み、日本語の運用能力や日本についての知識で何の遜色もない成果を外国の研究者たちは上げていきました。加えて、外国の日本研究者の多くは同時に、当然のように朝鮮語や中国語も修めていて、そこから、日本人には見えていないものを踏まえた日本研究も行う

れていきました。

こうした状況をいささか戯画的にまとめて言えば、一方で、日本人が行う日本研究は、「日本のことは外国人にはわかるはずがない」といった自負から、国史学や国文学を名乗って、閉じたものでした。他方で、外国人が行う日本研究は、日本人による日本研究がそのように閉じたものであることへの不信感から、「日本のことは日本人には見えていない」という疑いを隠し持つもので、やはり日本人に閉じたものになっていました。そのような相互の不信感を払拭すべく、「国際日本学」は、両者の日本研究を同じ土俵に載せ、それぞれがそれぞれを互いに照らし出し、両者がともにより客観的なものになるように図りました。これが「国際日本学」における「インターナショナル」な視点です。この HIJAS の試みは一定の成果を上げることができたと思います。以前と比べて、今日では、国内の日本研究者と国外の日本研究者との間での不信感は低減し、理解は増進されたと思います。そして HIJAS はこの流れの先で、「国際物理学」というのが奇妙に聞こえるのと同様に、「国際日本学」がいずれは奇妙なことば（疊語）になって、「日本学」がそれだけで、研究者の国籍など問題としない学問になることを望んだと言えるでしょう。

4. トランスナショナリズム

さて、そのような成果を一定自負しつつ、今日、HIJAS がさらに新たにもたらそうとしているのが「トランスナショナリズム」の視点です。日本研究をインターナショナルなものから、さらにトランスナショナルなものへ展開させることが目論まれようとしています。この展開は 2020 年に高田圭氏が HIJAS に着任して以来のことで、2021 年の HIJAS 機関誌『国際日本学』に掲載の高田氏の論考「グローバル地域研究としての国際日本学—日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法—」ⁱⁱで提示されました。並行して、「トランスナショナリズム」は、HIJAS が、アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）並びに「国際日本研究」コンソーシアム（CGJS）との共催で、2021 年と 2022 年に CEEJA で開催したアルザス・ワークショップでテーマとして扱われました。2021 年のテーマは「日本研究とトランスナショナリズム」であり、また 2022 年のテーマは「日本のトランスナショナリズムと帝国」でした。ⁱⁱⁱ本年 2023 年のアルザス・ワークショップのテーマも「現代日本とトランスナショナルな変容」とすでに決定しています。こうして、インターナショナルからトランスナショナルへの、日本研究の展開はすでに一定の実績を持ち始めています。

それにしても、「ひきこもりの国民主義」ということを措いたときの、日本研究の、ナショナルからインターナショナルへの転換に意味を一応、認めえたとして、そのインターナショナルからさらにトランスナショナルへの展開というのはどういうことであり、それはどのような意味を持つことなのか。それは当然問われるし、それに答えようというのが今日の会の、そして私のこの今のお話のそもそもの趣旨となるわけですが、乱暴ながら、すでに結論的に申せば以下のように言うことができるでしょう。すなわち、「インターナショナリズム」が、日本の研究に世界の視点も取り入れて、日本の実際の姿、日本の本領をできるだけ

客観的に正確に把握しようとするものだったとすれば、「トランスナショナリズム」は、日本の現実を世界に触れて捉えなおし、そこから日本の新しい姿、日本の未知で未見の本領を創造しようとするものである。「トランスナショナリズム」はこうして今日、「インターナショナリズム」以上の意味を持つとも言いうると思います。

以下ではまさにこのことを見て行くわけですが、「トランスナショナリズムとは何か」ということが、実は先の 2 回のアルザス・ワークショップでかなり激しい議論的となっており、この概念に不分明な点が残ることは否めません。私としては、それは、「トランスナショナリズム (transnationalism)」が、中黒の位置が問題ですが、「トランスナショナル・イズム (transnational-ism)」と「トランス・ナショナリズム (trans-nationalism)」の二様に捉えられているためだと考えます。その際に、前者「トランスナショナル・イズム」はその名に反することですが、実は「ナショナリズム」に留まっているのに対して、後者「トランス・ナショナリズム」は、「ナショナリズム」に対抗しており、「トランスナショナリズム」と呼ばれて然るべきものになっていると考えます。以下では、このような「トランスナショナリズム」の不分明さを解きほぐす作業から始めて、すでに触れた「トランスナショナリズム」の創造的な意義を確認できればと思います。ただし本来は社会学の概念である「トランスナショナリズム」を、哲学の立場から整理することが主な内容となっており、作業は仮設的で暫定的なものに留まることを前もってお断りしておきます。

5. ナショナル、インターナショナル、グローバル、トランスナショナル

ナショナリズムも、インターナショナリズムも、トランスナショナリズムも、ともにネイション (nation) を核に置いています。ネイションは国で、「国民」・「主権」・「領域」の三要素がそこには指摘されます。^{iv}国はこうして「国民」・「主権」・「領域」を有し、限り、限られ、閉じ、閉じられた静的な存在です。ただ、限り、閉じると言うことは、それが外、つまり外国を有しているからであって、その外国と、少なくとも潜在的には、動的な関係にあることを前提にしています。つまり国は国境で限られて、そこに内と外が存在しているとして、モノや人や情報が、内から外に、あるいは外から内に、平穏のうちに、あるいは暴力をともなって、流通し移動することが常に起りうるわけです。

こうして、外国をも含めて考えて、国に生じると想定される現象や出来事を、私としては、以下の四つの場合に分けて考えたいと思います。そしてそのそれぞれを、①ナショナル、②インターナショナル、③グローバル、④トランスナショナルと呼ぶことにしたいと思います。

①まず、現象や出来事が、限られ、閉じた国の内部でのことであり、そのとき国が「国民」・「主権」・「領域」の三要素を揺るがせにせず保っている場合、その現象や出来事はナショナルなものであるとします。たとえば、スポーツの国内大会は国境内のナショナルな出来事です。

②また、現象や出来事が、複数の国に渡っていて、一見、限られ、閉じた国を出ている

ように見えているが、それぞれの国がそこで「国民」・「主権」・「領域」の三要素を揺るがせにせず保持している場合、その現象や出来事をインターナショナルなものと呼びたいと思います。たとえば、オリンピックといったスポーツの国際大会には多くの国から選手が参加してくるが、それぞれ国旗を掲げ、もっぱらその下で競技をしており、国境のほんとうの乗り越えは起っていません。オリンピックはインターナショナルな出来事です。

③さらに、現象や出来事が、複数の国に渡っていて、限られ、閉じた国を出て、地球規模になっていて、そこで「国民」・「主権」・「領域」という三要素が、いちいち乗り越えられるということもなく、一挙に意識もされなくなっている場合、その現象や出来事をグローバルなものと呼びたいと思います。ヨットの単独・無寄港・無補給・世界一周の外洋レースに「ヴァンデ・グローブ」があります。フランス・ヴァンデ県のレ・サーブル＝ドロヌヌから出発しそこに戻ってくるのでヴァンデ（フランス）の名が付きますが、フランスはとくに意識されませんし、レースの参加者や優勝者の国籍もあまり意味がなく、とりたてて語られることはありません。

④最後に、現象や出来事が、複数の国に渡っていて、限られ、閉じた国を出ていて、かつ、そこで関係する国の「国民」・「主権」・「領域」の三要素のいずれも、あるいは、いずれかが、強く意識されているにもかかわらず、揺らぎ、破られている場合、その現象をトランスナショナルなものと呼びたいと思います。たとえば、日本の国技と言われる大相撲で、主要な力士の多くは現在、外国人です。その限りで大相撲で素朴に日の丸を掲げるとは躊躇されますが、かといって力士の出身国の国旗を掲げることも場違いで、国境が揺らぐ事態が生じていると言えます。大相撲は現在、国境を踏み越えていて、トランスナショナルな状態にあると言えるでしょう。

こうして、グローバルな現象や出来事において国境は意識されず、したがって、国境を（あえて）乗り越えるということも生じません。ナショナルな現象や出来事が国境を乗り越えていないのは当然だとして、インターナショナルな現象や出来事も、一見、国境を越えているように見えても、その場の人間たちは国は背負ったままであって、国境を乗り越えることにはなっていません。こうして、国境を破り、乗り越えることはトランスナショナルな現象や出来事においてのみ認められることとなります。

6. ベルクソン「閉じた社会」とナショナリズム

以上見たように、国をめぐって四種の現象が起りうるとして、そのそれぞれはどのようなメカニズムに従っているのでしょうか。このことを、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（Henri Bergson 1859-1941）の社会論を援用して少し見ていきたいと思います。

ベルクソンは最後の主著『道徳と宗教の二つの源泉』（1932、以下『二源泉』）で、人間社会に「閉じた社会」と「開かれた社会」を区別し、それぞれを生み、維持させ、また変化させる「源泉」を論じ、とくに両社会に必ず伴う「道徳」と「宗教」—前者における「閉じた道徳」と「静的宗教」、また、後者における「開かれた道徳」と「動的宗教」—

を論じています。^v

国は国境によって限られた静的なものです。それはベルクソンの言う「閉じた社会」に当たります。先回りをしてのべれば、ナショナルな現象もインターナショナルな現象も国境を開かず、ともに「閉じた社会」の現象です。グローバルな現象は国境を問題にしないのですが、国境を開くわけではなく、裏で国境を手つかずのままに放置していて、それはむしろ「閉じた社会」を温存します。他方で、国境を開くトランスナショナルな現象は、「開かれた社会」でのこととなります。

さて、人間は生物であって、たとえばアリ・ハチとも同じように、モノに働きかけて自己保存（生存）を図っています。そして、モノに働きかけるとき、アリ・ハチも人間も道具を用います。アリ・ハチは本能がしつらえた固定された自然の道具を用います（アリの顎、ハチの針）。それに対して、人間は知性（科学技術）によって新たな道具を発明します。そして、アリ・ハチにおいても、人間においても、この道具が多様であるのに従って分業が生まれ、その組織化のために社会が形成されます。アリ・ハチにおいては道具は本能で固定されているので、分業も固定され、社会も固定されています。しかし、人間においては道具は知性によって革新されていき、その結果、分業も組み直され、社会も変化していきます。ただ、道具をとっても、分業をとっても、社会をとっても、アリ・ハチにおいても、人間においても、それらはことごとく、種や個体の自己保存（生存）を図るためのものであり、自己に閉じています。「ひきこもる」ということは、日本だけのことでなく、国にとって自然なことなのです。

国はこうして「閉じた社会」です。「閉じた社会とは成員が相互に支え合う社会であり、彼らは自分たち以外の人間たちに無関心で、つねに攻撃か防御の態勢を取っており、要するに戦闘的な態度を取ることを強いられている」と言われています。「閉じた社会」は内において組織だっており、外に対して「戦闘的」です。国には「領域」があり、そこに「国民」がいます。^{vi}

また、「重力が物体に対するのと同じく、魂に対する力は恒常的に一定方向に向かい、諸個人の意志を同一方向へと傾けて集団の凝集を確保する。このようなものが道徳的責務である。…。[そして、]閉じた社会が存続すること、また、知性が持つ一定の解体作用に抵抗すること、さらに、各成員に必要な安心感を保持し伝達すること、それは作話機能に由来する宗教によってである」と言われています。^{vii}「閉じた社会」には、成員の意志を「同一方向」に傾け、集団の「凝集」を図り、社会の「存続」を図るために「道徳」と「宗教」が必ず備わります。ここで述べられていることは、国が「主権」を有しており、その「主権」が（暴力によってというより）「魂に対する力」（「道徳」）や「作話機能」（宗教）によって維持されることを示しています。すなわち、「主権」が〈主権在民〉や〈天皇主権〉の形で主張されるとき、それを支えるのは〈民の声は天の声〉や〈王権神授説〉といった神話であり、〈よき市民〉や〈よき臣民〉といった訓話です。その神話や訓話は、国旗、国歌、国語など多岐にわたる象徴によって、想像力に訴えて成員を支配しま

す。^{viii}

以上がベルクソンによる「ナショナリズム」のメカニズムの説明です。このメカニズムを、ナショナルな現象はもちろんですが、インターナショナルな、さらにはグローバルな現象も免れることはありません。

7. ベルクソン「開かれた社会」とトランスナショナリズム

そして、自己保存（生存）が脱却され到達されるのが「開かれた社会」です。その内実は、「閉じた社会」との比較で語られます。「都市国家（シテ）の障壁の突破」^{ix}が言われ、さらに、「閉じた社会から開かれた社会へ、都市国家（シテ）から人類への移行は、拡張の道を通しては決して行われぬ。それらは同じ本質を持たない。開かれた社会は、原理上人類全体を包み込むような社会である。この社会は、人類精鋭の数々の魂に断続的に夢想され、創造される度に自分の持つ何ものかを実現する。各々の創造は、人間の多少とも深い変形によって、それまでに乗り越えることが不可能であった困難を乗り越えることを可能にする」と言われています。^xここでは、「開かれた社会」が国の要件である国境（「領域」）を破ることが、端的に「障壁の突破」と表現されます。またそれは「人類全体を包み込む」のであり「国民」も持ちません。さらにそれは「自分の持つ何ものか」を断続的に（これから）「創造していく」と言われています。すでに確立されていて守るべきもの、つまり「主権」もそれは持ちません。

「開かれた社会」は国を「突破」した何かであって、それはトランスナショナルな存在と言えます。ただ「開かれた社会」は難解で、イメージも容易ではありません。ここでは、ベルクソンも用いているイエスの「山上の垂訓」の「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」を援用してなんとか補って考えてみましょう。

ベルクソンはその言葉に先立ってある、「目には目を、歯には歯を」を、まずは「閉じた社会」を代表するものと見なします。確かにこのことばは、平衡（釣り合い）という意味での正義の主張であり、これによって、「領域」も「国民」も「主権」も、つまり「閉じた社会」は見事に守られていくでしょう。それに対して、「右の頬をぶつ者には左の頬も向けよ」ですが、これは、これでは「領域」も「国民」も「主権」も守られていかなくなりませんが、しかしそれは奇妙に激しく意表をつくものであって、社会的であるにしても、「閉じて」いかないなにか、「まさか」といった意味で、創造的ななにかを示しています。そこにあるのはネガティブなものではなく、きわめてポジティブなものです。ベルクソンをもういちど引くと、そこでは、「人間の多少とも深い変形によって、それまでに乗り越えることが不可能であった困難が乗り越えられている」ということになります。

これが「開かれた社会」であり、ここで言われる「乗り越え」はトランスナショナルに当たっていると言えます。

8. ランドルフ・ボーンのとランスナショナリズム

さて、ここで哲学的解釈を離れ、トランスナショナルの普通の一般的意味にもどれば、それは単に「国境を越える」ということであって、モノであれ、人であれ、情報であれ、それらが、国境を、内から外へ、また外から内へと出入りすることに当たります。そのようなトランスナショナルな出来事は、インターナショナルな、またグローバルな、どのような状態にも、むしろ当たり前に前提となっていることでしょう。そしてこの当たり前の現象を「トランスナショナリズム」と名指すことも出来るでしょうが、私はそれを「トランスナショナル・イズム (transnational-ism)」と呼びたいと思います。それに対して、トランスナショナルが、政治学や社会学において、特別なこととして、インターナショナルやグローバルとも区別して用いられるようになったのは、20 世紀に入ってから、移民問題とのかかわりによってであり、この場合の「トランスナショナリズム」は、とくに「ナショナリズム」に対するといふことで、「トランス・ナショナリズム (trans-nationalism)」と呼びたいと思います。ここまでお話してきたのはもちろん後者についてであり、それを今度は社会科学の観点からも簡単に確認してみたいと思います。

この意味でのトランスナショナルという語の初出は、アメリカの作家ランドルフ・ボーン (Randolph Bourne 1886-1918) の論考 *Trans-National America*^{vi} (1916) においてだと言われています。この論考では、第一次世界大戦を引き起こしているヨーロッパ列強のナショナリズムの悪への考察を背景にして、アメリカ合衆国自身のナショナリズムが俎上に載せられ、その乗り越えが主張されています。問題は建国を担ったアングロサクソンたちに続いて、その後、アメリカ大陸に、ドイツから、スカンジナビアから、ボヘミアから、ポーランドから到着し、受け入れられていった移民たちに関わります。ボーンは彼らがアメリカに着くや、自分たちに固有の文化的伝統を捨てることを余儀なくされ、坩堝 (melting pot) に投じられていっている状況を、万一ドイツがヨーロッパで覇権を握ったあかつきに行うであろうことと重ねて批判しています。ボーンは建国以来アメリカを支配しているのは、言われている自由・平等の人権思想ではなく、ごくアングロサクソンの文化的伝統であって、なんら普遍的なものではなくナショナルなものである、とするのです。坩堝はアングロサクソンのすでに閉じられています。しかし、メイフラワー号に乗ってではないにしても、それ以降の移民たちも、自国から船に乗って同じようにアメリカに到達しているのであって、それぞれの文化的伝統は同じように尊重されるべきなのです。そして、それぞれの文化的伝統は、同じように、それぞれがアメリカの新しい文化を創造することに貢献すべきなのです。アングロサクソンの伝統の押し付けは、創造的であることに反する保守主義であり、アメリカ社会の前進を妨げると主張されています。文化の違いはむしろ新しい文化の創造に貢献するのです。「アメリカはナショナリティではなくトランスナショナリティとなる。すなわち、他の国々[の文化や伝統]と手を携えて、あらゆる太さと色合いを持ったたくさんの糸を、後ろへ前へと織り合わせてできる、一枚の織物となる」と言われています。^{xii}

9. リベラリズムとコミュニタリアニズムを越えて

ここであらためて留意されるのは、ナショナリズムを乗り越えるのに、普通持ち出される、個の自由と平等を言う普遍的人権の思想は語られず、この思想はむしろアメリカのアングロサクソンのナショナリズムと見なされているということです。現代アメリカの政治哲学者サンデルが、ジョン・ロールズのリベラリズム (liberalism) を批判する際に、批判的に用いている文化や伝統から自由な「負荷なき自己」という概念を用いれば、^{xiii}サンデル同様、ボーンも「負荷」からの自由を人間には認めず、その払拭しがたさを説いています。この点でボーンはサンデルのコミュニタリアニズム (communitarianism) を先駆していると言えるでしょう。ただボーンは、コミュニタリアニズムの相対主義は取らずに、諸文化を並列させずに、それらは「共感」(sympathy) によって「併合」(merge) するとします。こうして、アメリカ一国に関するここでの議論を国家間のものに敷衍してのべれば、「負荷」を認めないリベラリズム (ロールズ) はグローバリゼーションに当たり、「負荷」を認めそれを並置するコミュニタリアニズム (サンデル) はインターナショナリズムに当たっていると言えるでしょう。この両者に先立って、ボーンは「負荷」を認め、しかもそれを交わせる立場を主張し、その立場をトランスナショナリズムと名付けたのです。

アメリカの政治哲学からあらためてベルクソンに戻っていえば、「負荷」をなしとするリベラリズム (グローバリゼーション) は決して「開いて」おらず、アングロサクソンの「閉じた」もので、自己保存に囚われています (「保守主義」)。アングロサクソンの「負荷」が、「道徳」と「宗教」として残って垣塙を形成しています。国境は消失しているように見えますが、それはアングロサクソンのこの垣塙にすべてが「融解」(fuse) しているからです。その垣塙自身は境界を有し、「閉じて」いて、垣塙の外を排除しています。グローバリゼーション下での知識や貧富の巨大な格差のことが思われます。他方、コミュニタリアニズム (インターナショナリズム) は、複数のものを認め、一定の相対化を施しているとはいえ、「負荷」そのものを容認しており、そこにある複数の社会はそれぞれが「閉じて」います。トランスナショナリズムにおいてのみ、互いの「負荷」が切磋琢磨して破られて、新しい「開かれた社会」が到来します。

10. 方法的ナショナリズムと方法的トランスナショナリズム

このように提起されたトランスナショナリズムは、当初からそうであったように、その後も移民論の文脈でとりあげられ今日に至っています。それがどのようなかをもう一つ別の論考で確認してみたいと思います。Andreas Wimmer & Nina Glick Schiller の論考 *Methodological nationalism and the study of migration* (2002) を以下、簡単に見ていきます。^{xiv} この論考では、これまでインターナショナリズム、トランスナショナリズム、グローバリゼーションという題目の下で語られている多くが、実は隠れた仕方で「方法的ナショナリズム」(methodological nationalism) に縛られていて、表向きに関わらず、国境を越えておらず、国境に歴然と閉じられていることが示されています。そして、本当に国境を超えるトランスナショナルな事態として、われわれに突き付けられてきていることとして、移民

問題が取り上げられ、その特徴が語られます。つまり、この論考では、「方法的ナショナリズム」から出ることのむずかしさという形で、本稿がこれまで見てきた、インターナショナリズムやグローバリゼーションはナショナリズムを出ていないという論点が、確認されていると言えます。

この論考では、国境を越えること、ナショナリズムを乗り越えることのむずかしさは、「方法的ナショナリズム」が、(a)「無知」(ignorance)、(b)「自然化」(naturalisation)、(c)「地域的限定」(territorial limitation) という三つの仕方でわれわれの思考を支配しているからだ、と主張されています。まず(a)「無知」ということでは、社会科学のグランドセオリーが植民地や資本主義の問題をグローバルな現象として、グローバルの視点から扱っているとき、現実のナショナルなレベルでの問題は端的に無視され、転じて現実が語られるとき、その問題は直ちに「方法論的ナショナリズム」に任されてしまう、ということが示されています。民主主義がグローバルな問題だとして、いざ現実が問題となると、国名つきで「アメリカ独立」や「フランス革命」が素朴に持ち出されてくるわけです(一国民主義の問題)。次に(b)「自然化」ということでは、社会科学がさまざまな理論化において、自然に議論なしで、国を単位にすることが、示されています。歴史においても、政治においても、経済においても、議論での主語は自然に「イギリスが」、「フランスが」、「ドイツが」となっていくきます。研究をそもそも委託するのもしばしば国なのです。最後に(c)「地域的限定」ということでは、社会科学の研究の及ぶ範囲が国境で限られることが、示されています。国境までが語られれば議論は良しとされ、国境の向こうを語ることは回避されます。普遍的な基本的人権が問題だとしても、語られるのは国境を持った話し、すなわち、「アメリカ独立宣言」であり「フランス人権宣言」だということになります。

こうして、インターナショナリズムやグローバリゼーションの下でも生き続けている「方法的ナショナリズム」が行き詰まるのが、移民問題においてです。移民問題では移動先の国のナショナリズムが機能しなくなる理由が四つあげられています。第一には、移民には移動先である国の「主権」が及びません。第二には、移民は移動先である国の「国民」ではありません。第三には、移民は移動先である国の「道徳」と「宗教」が課す「連帯」には組みません。第四には、移民は定住せず、移動先である国を「領域」とはしません。逆に言えば、移民から移動元の国の「負荷」を払拭することはできないのです。共和主義は成り立ちません。他方で、移民は旅行者でもなく、国際会議への代表参加者でもなく、移動先の国での本格的な生活者であって、移動先の国の「負荷」も免れません。逆に言えば、移動元の国のナショナリズムも成り立たないのです。こうして、移民を移動先のであろうと、移動元のであろうと既存の国境のうちに「閉じ」こめることはできません。単純なナショナリズムは無力です。他方で、インターナショナリズムは交互にはありますが、やはり移民に既存のナショナリズムを当てはめており、移民は国境の「閉じ」を免れてることはできません。また、グローバリゼーションは国境を持たないように見せかけていますが、それは結局は、強国(移動先の国)の国境を押し付けるのです(グローバル企業の従業員は結局アメリカ流にや

っていくこととなります)。論考は、さらに、国境や「負荷」を一切考えないとする「流動主義」(fluidism)にも触れていますが、それも採用できないとします。なぜならば、その流動主義の下でも、グローバリゼーションの場合と同様に、いずれは強国(移動先の国)の国境が採用されることになるからです。「流動主義」が依拠する脱構築思想はフランス生まれです。この立場では結局万事はフランス流に落ち着きます)。

移民が移動先である国で、移民自身にとっても、移動先国にとっても、前進を生み出していくには、移民の「負荷」と移動先の国の「負荷」が互いに折れて、既存の国境がわずかでも実際に「開かれ」、破られることが必要なのです。そこにあるのがトランスナショナリズムです。論考はそのトランスナショナリズムを、「方法的ナショナリズムというカリュプデイス(Charybdis) (前門の虎)と「流動主義(fluidism)の方法というスキュラ(Scylla) (後門の狼)の間に道を見つけることである」と指摘しています。^{xv}そして、まさにそう指摘することで終わっています。トランスナショナリズムはわれわれを新たな道の創造に差し向けるが、それ自身は常に未完にとどまります。トランスナショナリズムのこの未完性については、また別の論考が、要約的に、次のように語っています。「トランスナショナリズムは、内的にプロセス的で、成りつつあるという性格を持っているため、正確かつ明確な理論的定義を与えることは困難である。…。[だが]トランスナショナリズムは変革的であり、現代社会に変化をもたらすのに十分な力を持っている。」^{xvi}

11. トランスナショナリズムと日本

以上、トランスナショナリズムについて、ベルクソンの社会哲学や現代アメリカの政治哲学を援用して理解を試みてきました。科学技術のさらなる進歩で、分業体制の流動化が加速し、移民の問題を筆頭に、国の、そして国と国との関係の変化が迫られているそのときに、対応としてまず生じてきたのが、インターナショナリズムであり、グローバリゼーションでした。しかし既に見たように、それらは「方法的ナショナリズム」を脱してはおらず、解決を与えるものではありませんでした。自国の「負荷」と他国の「負荷」とを併置しても(インターナショナリズム)、「負荷」を一見解消しても(グローバリゼーション)、「負荷」は妨げとして残ってきます。(友好を謳うインターナショナルなスポーツ大会でのメダル争い。また、国籍など問わないグローバル企業でのアメリカ風文化の支配)。自国の「負荷」と他国の「負荷」が触れ合って、二者択一的にどちらかが勝ち残るというのではなく、それぞれがともに他に触発されて、変容し新たなものになること(創造)が必要です。それを追究するのがトランスナショナリズムということになります。

このようなトランスナショナリズムが、アメリカやヨーロッパでは主に移民問題をめぐって主張されてきたとして、それでは、それは日本にどう波及し、日本研究にどう関わりうるのでしょうか。日本が移民問題と無縁でないことは言うまでもありませんし、日本における移民問題に絞って、トランスナショナリズムを扱った研究も既に存在しています。^{xvii}そうした先行事例も視野に入れて、以下、最後に、トランスナショナリズムと日本研究との関係

を、トランスナショナリズムが HIJAS でどう位置づきうるかを問う中で考えてみたいと思います。

すでに見たように、HIJAS の国際日本学は、ナショナリズムをインターナショナリズムによって乗り越え、さらにそれをグローバル化にまで引き上げることを目指すものであったと言えるでしょう。ただ、改めて、インターナショナリズムもグローバル化も、ナショナリズムを乗り越えさせないのであり、事実、そうした間に進行して行ったのが、世界における日本研究の地盤沈下です。今や、「日本研究の死」さえもが研究者間で語られていると言います。^{xviii}日本研究のそのような状況は、少子高齢化、人口減少、経済不振、貧困の拡大といった問題を抱える日本社会自身の低迷とも連動しているのでしょうか。そして、そうした問題そのものよりもさらに深刻なのは、そのような問題の中にある日本人の「ひきこもり」現象であって、そのような現状を打破し日本を前進させるためには、ナショナリズムの真の乗り越えが必要なのだと思います。ボーンがアメリカのナショナリズムを克服すべく提起したのがトランスナショナリズムであったわけですが、「ひきこもりの国民主義」という日本の現状に求められているのもトランスナショナリズムではないのか。トランスナショナリズムによって、日本の新しい本領が創造されてくるとき、日本は外の耳目にも改めて魅力あるものになっていくのではないか。

しかしながら、トランスナショナリズムが、大方、移民問題をめぐるものであるとして、今日の日本のどこに移民問題があるのでしょうか。移民問題が、アメリカやヨーロッパのように重大な仕方で、日本にまだ存在していないことは事実でしょう。そうだとすると、そのような日本でトランスナショナリズムは活発に活用されていくのでしょうか。この問いに対しては、実は日本も本質的に同じ移民問題に、これまでもさらされてきたし、現在もますますさらされていると答えうるでしょう。科学技術の急激な発展によって、モノの動きに大きな変化が生じ、人にも情報にも大きな流動性が生じています。それは、「領域」・「国民」・「主権」の三要素を、程度の差はあれ、揺るがせています。「領域」が根本的に揺らげば戦争になりますが、そうでなくても、リアルにであれヴァーチャルにであれ、人の激しい動きは妨げられえず、その動きは、閉じた「国民」のあり方、そして、文化や伝統の「負荷」として存在している「主権」のあり方に、影響を与えざるをえません。ここにあるのは、本質的に移民問題であり、日本もそれにさらされており、そうであるから、それへの防御反応として、「ひきこもりの国民主義」もはびこることになっているとも思われます。「ひきこもり」があるということは移民問題があることだと言えるでしょう。

「方法的トランスナショナリズム」はこうして日本における広い意味での移民問題のいろいろな場面、すなわち、人や情報や文化の外からの、また外への移動が内外を接触させ、わずかでも摩擦を生じさせているような場面に赴いて、そこで起っているはずの反発や排除の動きをかいくぐって、わずかでも「共振」^{xix}し合っているものを見出し、救い出してくれることになるでしょう。わずかなものであれ、その「共振」によって、内にあるこれまでの「負荷」（「道徳」や「宗教」）は揺らぎ、外からの「負荷」と予想できないし方であつ

て、拡大し変化していくはずです。「領域」はともあれ日本の「国民」のあり方、また「主権」のあり方がそのとき、強く言えば、わずかにではあれ新たに創造されていきます。

12. 詩人伊東静雄の戦争詩

方法的トランスナショナリズムを日本において、狭い意味での移民問題に限らず、文学研究にも用いるであろう事を、最後に、一つの小さな例で見たいと思います。次の引用は詩人伊東静雄（1906-53）の詩作品「わがうたさへや」です。

わがうたさへや

おほいなる 神のふるきみくにに
いまあらた
大いなる戦ひとうたのとき
酣（たけなわ）にして
神讃（ほ）むる
くにたみの高き諸声（もろごゑ）

そのこゑにまじればあはれ
浅芽（あさじ）がもとの虫の音の
わがうたさへや
あなをかし けふの日の恭（かたじけ）なさは

（「文芸世紀」昭和 17 年 4 月号）

これは伊東静雄の第三詩集『春のいそぎ』（昭和 18 年）の冒頭に置かれた詩です。しかし戦後に彼自身がアンソロジーを編んだときに、彼はこの詩を〈戦争詩〉として自ら省いています。個人的なことで恐縮ですが、伊東静雄の詩は昔から好きでときどき目にして今日に至っていますが、しかしそのたびに、おそらく微々たるものと言ってよいのですが、彼が戦争協力の詩を書いたということが、それでも飲み込めなかつたかえとして残って来ました。この詩も一見したところ、開戦からまだ数ヶ月の戦勝続きの高揚感に突き動かされての、高村光太郎ばりの〈戦意高揚詩〉に見えます。しかし最近、この詩について語る詩人青木由弥子の次の言葉に出会いました。「漢字の〈声〉とひらがなの〈こゑ〉。〈こゑ〉はむろん〈くにたみ〉の諸声を受けているが、平仮名で記された〈わがうた〉の側に引き寄せられ、諸声と対置される位置に置かれた声である」（青木由弥子『伊東静雄一戦時下の抒情』土曜日術社出版販売、2023）。^{xx}。青木のこの一文は、この詩で伊東静雄は漢字の〈声〉のナショナリズム（ウルトラナショナリズム）から出て、密かに、平仮名の〈こゑ〉のトランスナシヨナ

リズムに移行している、ということを示唆しているでしょう。トランスナショナリズムがナショナリズムから出ることだとして、それはこのように密かなことでもありうるのでしょう。この一文で、伊東静雄に対するわだかまりが幾分か解消された気持ちがしたことは事実です。

HIJAS の今後の国際日本学研究は、「方法的トランスナショナリズム」を駆使して、移民問題はもとよりですが、人であれ、モノであれ、情報であれ、それが、社会的にであれ、文化的にであれ、「ナショナリズム」に大なり小なり軋みを生じさせている場面に赴いて、「共振」（創造の徴）の具体的な例を広く収集し、集積してくることになるでしょう。そのようにして、HIJAS は「ひきこもりの国民主義」に代わる「開かれた社会」の創造的なあらわれを、過去と現在の日本の各所で後押ししていくことになるでしょう。

i 酒井直樹『ひきこもりの国民主義』（岩波書店、2017年）pXXIVを参照。

ii 『国際日本学』18号、2021年2月、pp3-36。 <http://doi.org/10.15002/00023757>

iii HIJAS 以下ホームページの「2021年度・2022年度 Event Report」を参照。

<https://hijas.hosei.ac.jp/>

iv 「国民」・「主権」・「領域」という、国（国家）の三要素の定式化はドイツの公法学者ゲオルグ・イェリネック（Georg Jellinek、1851-1911）による。

v 以下、引用に際しては、ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』（合田正人・小野浩太郎訳、ちくま学術文庫、2015）を参照した。

vi ベルクソン（2015）p367。

vii ベルクソン（2015）p368。

viii 「主権」は「道徳」と「宗教」によって支えられる。「道徳」は理性に依り、「宗教」は想像力（「作話機能」）に依るといふように両者は区別されるが、ここでの理性は「夢遊状態」にあるとされており形而上学的である（ベルクソン（2015）p32）。こうして、「道徳」も「宗教」もともに広く、想像力がもたらす神話の産物とみなされよう。その神話を現実に機能させるのは可視的な象徴である。この象徴がどうしても虚構であることを、酒井直樹は「それらは死産される」と述べている（酒井直樹『死産される日本語・日本人「日本」の歴史—地政的配置』（講談社学術文庫、2015年）を参照）。

ix ベルクソン（2015）p77。

x ベルクソン（2015）p368。

xi Atlantic Monthly, 118 (July 1916), pp86-97. ただし、以下ネット上のものを参照した。
<https://www.theatlantic.com/magazine/archive/1916/07/trans-national-america/304838/>

xii *Trans-National America* III からの引用。

xiii マイケル・サンデル『民主政の不满—公共哲学を求めるアメリカ・上』（勁草書房、

2010年) 第1章(「リベラルの自己」) 参照。

^{xiv} Andreas Wimmer & Nina Glick Schiller, *Methodological nationalism and the study of migration* (European Journal of Sociology Vol. 43, No. 2, 2002, pp217-240).

^{xv} Andreas Wimmer & Nina Glick Schiller (2002) pp235–236.

^{xvi} Miriam Tedeschi, Ekaterina Vorobeva & Jussi S. Jauhiainen, *Transnationalism: current debates and new perspectives* (GeoJournal 87, 2022, pp603-619), p605.

(<https://doi.org/10.1007/s10708-020-10271-8>)

^{xvii} たとえば、広田康生、藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ場所形成とアイデンティティの都市社会学』(ハーベスト社、2016)では、日本人のハワイ移民、日系ブラジル人の群馬県への移住、新宿コリアタウン、ニューヨーク・イーストヴィリッジの日本人社会を事例として扱い、トランスナショナリズムが日本に関して論じられている。文化と文化が触れて排除しあうのではなく「共振」するケースが示されている。

^{xviii} 高田圭(2021) p18.

^{xix} 広田康生・藤原法子(2016) p53, p118, p129などを参照。

^{xx} 青木由弥子『伊東静雄一戦時下の抒情』(土曜美術者出版販売、2023) p57。